

# ドナルド・H・フリッシュマン 「現代マヤ演劇と民族紛争——歴史の再発見と再解釈」<sup>1)</sup>

Donald H. Frichmann, « Contemporary mayan theatre and ethnic conflict : The Recovery and (Re)Interpretation of History »(1995)

自分たち自身の、そして自分たちの共同体の「現実を再発見する」こと、「隠ぺいされ、嘘で塗り固め、偽装されたアメリカの歴史の現実を変革する」(ガレアーノ)こと、そのことに意識的にとりくもうとする現代マヤの芸術家にとって、ドラマはますます心惹かれる芸術形式になっている——そんなことを、私はこのエッセイで語りたいと思っている。こうした目的意識に立ったマヤの芸術家たちは、先住民に対する植民地支配の押しつけと浸透を決定的なものにした歴史的諸事件にあらたな解釈をくわえて舞台に乗せている。そうした仕事は、一面からすると、インディヘナの観衆が口頭伝承の伝える予言に託してきた意味作用を補完するものである。私の焦点は二つの代表的な芝居、カルロス・アルマンド、マヤ名ドズル・エクの『異端審問、もしくは二つの文化の衝突』(1988-91)と、チアパス文学演劇コレクティブ、スナ・フツィバホム Sna Jtz'ibajom [作家の家] 作の『ジャガーの王朝』(1992)に絞られることになるだろう。前者は1562年、ユカタンのマニでおこなわれた異端狩りの歴史的意味を検証した作品であり、後者は古代マヤの歴史と抗争、そしてスペインによる軍事的征服に光をあてている。それぞれの作品について論ずる前に両劇団の歴史と背景を簡潔に紹介しておこう。

これらの作品を私が重視するのは、芸術的、社会的、文化的、そして政治的にも、それらが大きな意味をもつと考えるからである——直接にマヤの地域においても、より広範なラテンアメリカという文脈においても、その意味するところは大きいと思われる。マヤは古い時代から儀礼形式のドラマを演じてきたが、一方、ドズル・エクのサク・ニクテ Sac Nictë [「白い花」] 劇団やスナ・フツィバホムなど、現代のパフォーマンス・グループの活動は完全にユニークなものだ。そのユニークさにもかかわらず——おそらくはそのユニークさのゆえに、両劇団はマヤ地域において幅広く受容され、その声望はいまや地域とメキシコの国境をこえてますます高まっている。両劇団はまた、かつてのメンバーが独立することに

よって、そこからいくつかの新しい劇団が育つ苗床ともなった。

私がマヤの演劇や儀礼的ドラマと頻繁に接するようになったのは1986年1月、メリダに住む友人の人類学者に紹介されてマヤの劇作家で二重言語教師でもあるカルロス・アルマンド・ドズル・エクと知り合って以来のことだ。何度かオシュクツカブ (Oxkutzcab) のドズル・エクの家を訪問し、たえず手紙のやりとりを重ねている間にわれわれの交友は緊密なものになった。彼はテキサス・キリスト教大学で二度ほど講義し、テキサスの我が家の客となった。彼と彼の家族もまた、私の妻と私を何かとオシュクツカブの家に迎え入れ、トラックやバスで劇団が巡演に出るときは私たちを伴ってくれた。

「作家の家」との縁は1989年に始まる。このグループの長年の友人であり、相談役でもあったロバート・ローリンが私に電話をよこしたのだ。7月、オースティンに招く予定だが、その後、フォートワースの方で何かできないかという打診であった。私はテキサス・キリスト教大学を説き伏せて、彼らを招待させた。これが最初の出会いとなって、以来、われわれの仕事上での、また個人としての交流は強められていった。一つにはチアパスのサン・クリストバル・デ・ラス・カサスでおこなわれた彼らのワークショップに私が赴いたこと、そして1992年10月にはフォートワースでの彼らの公演と講義が実現したことがそれを援けた。

因みにいえば、ユカタンのマヤとチアパスのマヤは同じではない。相異は話す言語から衣食に亘り、さらにくわえてマヤのカトリック信仰はチアパスのそれよりもユカタンの方がずっと正統派的だ。ユカタンの人間は外部者にたいしてより開放的で、マヤ語とスペイン語をとりまぜて使う傾向が強いが、チアパスのツォツィル・マヤやツェルタル・マヤの共同体はより閉鎖的で、文化的にはより保守的だ。マヤ語を尊重する気風が強く、単一言語使用の傾向がより強くなる。最後にチアパスのマヤは地主や官憲による迫害に曝される度合いがユカタンの仲

1) [訳注] 翻訳に際しては以下を底本とした。J. Ellen Gainor (ed), *Imperialism and Theatre : Essays on world theatre, drama and performance*, New York, Routledge, 1995, pp. 71-84.

間よりもはるかに多く<sup>2)</sup>、それがこの地域における民族的・階級的軋轢をより深刻なものにしている。

## 民族的抵抗、カルナバル、現代マヤ演劇

過去 500 年の間に多くのアメリカ先住諸集団が忘却の淵に追い込まれてきたが、総体としての先住民族がアメリカの、そしてメキシコの文化地図から消えたわけではない<sup>3)</sup>、彼らが受動的で静態的な植民地的他者であったことなど一度としてない。独立以前のヌエバ・エスパニヤと独立以後のメキシコは、先住民の反乱に繰り返し悩まされてきたのであって、近くは 1994 年のネオサパティスタの蜂起にいたるまでそれは続いている<sup>4)</sup>。ラテンアメリカの先住諸民族が置かれている植民地的被支配の状況、民族差別、政治的抑圧、社会的貶下、住居隔離、経済支配、法的不平等の数々を思えば、それは何ら驚くにはあたらない。スペインから独立した後も、インディヘナス人民は内部植民地主義によって痛めつけられてきた。土地を奪われ、よそ者のために働かされ、意に反して新しい貨幣経済の中に組み込まれ、主権国家というこれまでとは違う支配の形態の下に置かれることになった。植民地社会がそのままナショナルな社会になったのだ(スタベンハーゲン)。

19 世紀を通じて白人とメスティソ上層による新植民地体制が強化され、その結果として 1847-53 年にはユカタンで、1867-70 年にはチアパスでも、「カスタ戦争」と呼ばれるマヤの一連の民族蜂起がはじまっている。現代のドラマ上演には、この時代の闘争劇とのつながりを感じさせるものがある(ヴィクター・ターナー)。

ユカタンのマヤ反乱民の地域では 1849-50 年にかけて「すぐれた演劇」が上演されていたという(カリーリョ・イ・アンコーナ)。「歌と踊り」をともなうもので、スペイン人の侵略と征服」を題材にしたものだったという。地理的・歴史的なコンテクストから推して、それは反植民地主義の観点にたった劇であったと考えてよいだろう。1965 年、著名なマヤ学者であるバレーラ・ヴァスケスは、ユカタン半島の先住民によって多く演じられてきた近代史をテーマとする演劇作品の片鱗が、このような形で僅かに示されているのではないかと推察し

ている。

チアパスでは、民族的葛藤をドラマ的に表現する儀礼は主としてマヤのカルナバルの形で挙行されている。カスタ戦争やスペイン人による征服以降の重大事件はことごとくこれらの儀礼的パフォーマンスの中に組み込まれている。ブリッカーによれば、「カルナバルの儀礼はすなわち歴史的ドラマなのであり、しかしそのドラマはシンボリックな仕方です民族対立の歴史を描いているのだ。この儀礼化された民族対立劇において重要なのは歴史的事件の時系列的な順序ではなくて、その構造を通して伝えられるメッセージなのである」。すなわち儀礼は人々を二つのグループに分け、征服者と被征服者の闘争として演じられるのである。

そのメッセージ効果は、一面では、ヴァンシーナが「テレスコーピング」あるいは「遠近画法」と呼んでいる歴史的時間のフォルクローアの縮尺によって達成されている。その結果の最たるものは、次の二つで、まず第一に人間と神的存在とが習合し、歴史的な出来事は始原のそれに通ずる性格を帯びたものになる。第二に、当該社会にとっての適合性を失った人物や事件は削除されていく。フォルクローアの中で時間が歪曲されるのはインディオ社会に固有なことではないが、マヤの場合、時間はつねに円環的な、伝承の中の時間として把握されている。この理論家たちの指摘はユカタン・マヤの演劇作品、たとえば『異端審問 二つの文化の衝突』に見られる時間の歪曲を理解する上で重要な意味をもつだろう。

このエッセイでとり上げる二つの芝居は、いずれも西洋の演劇的コードを意識的に踏まえた現代作品なのだが、彼らはそれを異なる方途で今日のマヤに適合しようとしている。まずスナ・ツフィバホムだが、このグループは国際的な接触の機会が多く、来墨して技術を伝えてくれる外国演出家や専門家にも事欠かない。たとえばラルフ・リーは毎年のようにゲスト演出家としてこのグループの活動に参加しており、彼の伝える仮面づくりの技法は、しばしばこの劇団の舞台効果を著しく高める要因になっている<sup>5)</sup>。

第二に、メキシコの学校教師は、祝日の行事のため、

2) [原注] たとえば Amnesty International, *Mexico : Human Rights in Rural Areas*, London; 1986.

3) [原注] 1990 年の国勢調査によると、メキシコのインディヘナ人口は 6,411,972 人、全人口の 7.9% である (56 のエスニック・グループに分かれる)。ユカテック・マヤ語の (5 歳以上の) 話者はナウアトル語人口のそれについて多く、それぞれ 1,100,092 人、713,116 人である。チアパスではツェルタル・マヤが 6 番目に大きなエスニック集団であり、258,835 人、ツォツィル・マヤが 7 番目、232,423 人である。Instituto Nacional de Estadística, Geografía, e Información, *La Población de México en 1990*, Aguascalientes; INEGI, 1992. による。

4) [原注] 1510 年から 1941 年にいたるアメリカ全域での先住民の抵抗運動のリストが Munro S. Edmonson, *Nativism, Syncretism, and Anthropological Science*, New Orleans: Tulane University Middle America Research Institute Publication No. 19(1960): 186-188 に記されている。

5) [原注] Lee は New York の Mettawee River Company, Salem の演出家。Sna Jtz'ibajom と同様に、リーの巡演も民話を多く手

生徒に何らかの形で演劇的パフォーマンスをさせることを日ごろの仕事の一つにしている。とはいえ多くの場合、教師も生徒も学校以外の場では劇の上演に接する機会は事実上ない。まさにこのギャップゆえに、演劇は文化的越境、あるいは文化混淆の絶好のプロセスになっていくのだ。作者、演出家、アーティストは、これはいいぞと思ったものは、何であれ、お構いなくとり入れていくのである。二重言語教育者であり、ドラマティストであるドズル・エクは、かつて私にこんなことを言っていた。「演劇がどうあるのがよいのかなんて、僕にはよく分らないよ。歌うのがよいと思えば歌うし、踊ればよいと思えば踊る。要するにやりたいことをやるだけの話だ」。このことの結果として、今日のマヤの世界観と古いインディヘナのパフォーマンス様式（儀礼と歴史劇、社会・政治風刺、踊り）、それと西欧的な演劇の構造（ドラマ、コメディ、ファルス）とが分かちがたく混淆していくことになるのである。ドズル・エクとサク・ニクテ劇団の場合、後者は教員養成課程と学校演劇の実践を通して、また地方都市の劇団公演（とくにテアトロ・エレナのそれ<sup>6)</sup>）、そして近年はユカタン・マヤの世界にも進出するようになった国際ケーブル・テレビ網を通して内部化されていったようだ。

## 異端審問もしくは二つの文化の衝突

非インディヘナの著者たちによる歴史研究の成果<sup>7)</sup>とユカタン・マニ地方の口頭伝承、この両者に刺激されてドズル・エクは『宗教裁判もしくは二つの文化の衝突』を書いた<sup>8)</sup>。1562年のおぞましいマニ地方の異端審問、いわゆるマニ宗教裁判にたいするマヤ人の歴史意識をもっと高めたかったと、作者は創作の目的を語っている。

この歴史的イベントについての現代の歴史家たち（非マヤ系の歴史家たちであるが）の研究は、以下の点で一致を見ている。スペイン・フランシスコ修道会のグアテマラおよびユカタン管区長・ディエゴ・デ・ランダとその一

味の修道僧たちが、数か月にわたって異教狩りのキャンペーンを繰り広げた。ユカタン・マヤの首長たちは公衆の面前で辱めを受け、おそらく数万人のマヤの「偶像崇拜者」がマニの教会の境内で残酷な拷問に付された。158人が死亡し、少なくとも15人が拷問を逃れるために自殺し、さらなる多数の者が不具になったという。ランダが企んでいたのはマヤ人のリーダーシップ（とくにマニ地方のクシュー王朝）を無力化してフランシスコ会の権威を高めるだけにとどまらず、マヤ人の宗教と文化を根こそぎ壊滅させることであった。この目的を達成するために、ユカタンの絵文書をはじめとする大量の文化遺産がマヤの上層階級の面前で焼却処分につせられた。こうした蛮行のすべてはランダの機嫌を損ねまいとするスペインの世俗権力者たち、とりわけユカタン地方の大守（知事）ディエゴ・デ・キハーダの事なかれ主義的な黙認の下でおこなわれたのである<sup>9)</sup>。

上記が作品「異端審問」の一つのプリ・テキストであるが、いま一つのそれはマヤの長老たちが語ってきた言い伝えである。両者の語るところはほぼ一致しているのであるが、ただ一つ、例外があって、マヤの首長の名が異なっている。マヤの口頭伝承では1562年の異端審問に際してのマヤ側の代表者はトゥトゥル・シウ王 Tutul Xiu となっている。しかし信頼すべき史料によれば<sup>10)</sup>、トゥトゥル・シウはウシュマルの地方豪族で、1420年にマニに遷都している。—— 1562年の事件当時からすると、142年も前の話である！ その後4代目の後継者がククム・シウで、征服者フランシスコ・デ・モンテホに服して1548年に受洗し、洗礼名をフランシスコ・デ・モンテホ・シウとした。スペイン国王の臣下としてではあったが、そのままマニ地方の太守の座を安堵された。とはいえ、その彼もまたランダの魔手を逃れることはできなかったのである。1562年のスペイン国王宛ての書簡でククム・シウはフランシスコ会の横暴を訴えている。「彼らはわれわれを拷問し、殺戮し、辱めた」と（クレンディンネン）。

がけている。

- 6) [原注] このもっぱらユカタン的な劇場については、Donald H. Frischmann, “cholo’ habla del Teatro Regional,” *Novedades de Yucatan suplemento Cultural*, 15 and 21 March 1987: 1 and 6-7.
- 7) [原注] データは主として Luis Ramirez Aznar の新聞記事から引いた。アズナルはメリダ在住の声望の高い歴史家であり文化ジャーナリストである。
- 8) [原注] ドズル・エクとサク・ニクテによる作品はおおよそ15作を数えるが、この作品は今までのところドズル・エク自身が書き下ろして演出した唯一の作品である。とはいえオーラルな即興的手法がサク・ニクテの芝居づくりの特質であるから、私が引用するテキストはどれか特定の公演を反映したものではなく、ヴァーチャルな、あるいは文字面のテキストを構成するものにすぎず、多くの実舞台をたんに近似的に伝えるものでしかありえない。しかもサク・ニクテのやり方はまさに Fabian の指摘するように「舞台は前もって書かれた台本のたんなる舞台化ではなく、一回一回が創作であり、形成であり、創造」なのである。
- 9) [原注] たとえば Inga Clendinnen, *Ambivalent Conquests: Maya and Spaniard in Yucatan, 1517-1570*, Cambridge University press, 1987; and Luis Ramirez Aznar, *Auto de Fe; Mani*, Merida.: Dahemont, 1986.
- 10) [原注] The Xiu Family Papers; William Gate 評訳による Friar Diego de Landa, *Yucatan: Before and After the Conquest*, New York: Dover, 1978, 121-26. 参照。

歴史のテレスコーピングはまさにこのようにしておこなわれるのだと、私は思う。ドズル・エックはクム・シウではなくトゥトゥル・シウを1562年のマヤ人民の代表者に据えることで、意識的か無意識的かは分からぬが、民間の口伝えの歴史の語りに準拠しているのである。文化英雄もしくは民族の擁護者としての祖型は、民衆の精神の中で4代の時間を飛び越して再現する。益体のない先祖は、歴史の集合的記憶から抹消されてしまうのだ。

もう一つ面白いのは、バイリンガル教育者としての作者の生業<sup>11)</sup>とそのエスニックな世界観が、トゥトゥル・シウの人物設定に大きく影響していると思われることだ。トゥトゥル・シウとランダは言っている言葉が通じなくて、すぐに苛ついてしまう。改宗を迫られたトゥトゥル・シウが最後にいう台詞には、マニのドロテオ・アランゴ二重言語学校プロジェクトの主張が込められている。そこに響いているのは、植民地主義者が一方的におこなう言語強制への抗議なのだ。

**トゥトゥル・シウ** (やはり苛立って) 俺には、あなたの言っていることが分らん。俺たちはマヤ語を話し、マヤ語で考えている。夢だって、マヤ語で見る。他人の言語を話したり、習ったりしなければならぬ理由はない!<sup>12)</sup>

他のくんだりでは、いましも始まろうとしている植民地支配の過酷な状況を、著者はスペイン人たちの声にかぶせて告げている。

**ランダ** フランシスコ修道会の修道僧は、することの一つ一つを記録するものなのじゃ。覚えておけ、今日は1562年7月12日の日曜、フェリペ2世と聖なる異端審問官の名において、われわれは今より宗教裁判を執行する。これはスペイン王国の誇りとするところ、神もまたそれを嘉したもうであろう。

トゥトゥル・シウが十字架を運ばされ、偶像崇拜者として告発された者たちがその後続く。

**ランダ** これより、われわれがこの土地を治める。

彼らの農作物、彼らの衣服、彼らの音楽、踊り、すべてをわれわれが変えるであろう……

**キハーダ** 彼らの宗教、彼らの言語、彼らの思考方法、いや彼らの名前すら、変えてやるのだ。われわれスペイン人こそが優れた文化であることを示し、彼らをして彼らの文化を蔑ませるであろう。われらの征服者たちがそのことの任を担い、彼らをしてわれらの法に服従せしめるであろう。

それに応えてトゥトゥル・シウの古い師が投げ返す予言は、スペイン人の楽観主義——と、そのイロニックな性格——に冷や水を浴びせるものだ。

**古い師** 力で全部を変えるなんて、できないことです。私たちの衣服、私たちの習慣、私たちの言語を変えるなんて！何年、何百年とたつて、われわれは悟るだろう。私たちはまったく変わってなどない、と。

現実はその中間に到着した、といえるだろう。スペイン人の広言はけっして完全には実現せず、多くの文化的強制はマヤ人によってたんに戦略的に、自らの文化システムに間尺を合わせて吸収されることになったのだ。宗教でも次第に重点のシフトがおこったとファリスは指摘している。「古い、剣呑な、(秘密にしなければならないために)ますます機能不全に陥った偶像崇拜は秘かにキリスト教の諸要素の中に紛れ込み、聖人崇拜というもっと剥き出しではない混淆信仰に形を変えて、教会制度の内部に定着していったのだ。」彼はこうも付け加えている。「このシフトはディエゴ・デ・ランダ修士の強力な反異教キャンペーンによって大きな推力を与えられた」と。そのお蔭で植民地時代の末期になると「古い神々のはもはや独立したアイデンティティをもちえなくなっていた」と。

しかしながらスペイン・キリスト教植民地主義は、粘り強いマヤの人々が自らの土着信仰を守り抜くことを完全に阻止することはできなかった。今日にいたっても尚、キリスト教の神々はしばしば二つの平行線を描いて祀られているのだが、オーソドックスなカトリックの儀式と古い土着的な儀礼とは、ときには抵触もする形で結

11) [原注] ドズル・エックは la Escuela Primaria Federal Bilingue Doroteo Arango の創立者であり校長である。彼は1978年に Sac Nacte とこの学校を同時に立ち上げた。Mani のマヤ住民の大半はユカタン・マヤ語とスペイン語の二重言語使用者であるが、この人々のための学校はこれ一つしかない。

12) 私の英訳は、作者が公刊したスペイン語版からの翻訳である。実際の舞台では、マヤの登場人物はマヤ語を話し、スペイン人はスペイン語を話している。かつて双方がはじめて出会った時期も、きっとそうであったはずだ。サック・ニクテの観衆は大半がバイリンガルであるから、このやり方が大変うまく機能する。

合しているのである<sup>13)</sup>。

古来の文化的アイコンが火に投げ込まれていく情景を目にしたトゥトゥル・シウの最後の言葉には、古き、そして新しき植民地主義と対峙する王の予言と希望のメッセージが込められている。

トゥトゥル・シウ あんたたちはわれわれを打ち負かした。そう思うかもしれない。しかし、いつの日にか、あんたがたはそのしっぺ返しを受けることになる。なぜなら、われわれは自由に生まれ、われわれが呼吸する空気のように、空を飛ぶ鳥たちのように、自由な人間であるからだ！ そのときが来れば、われわれの神々がわれわれを守り、われわれはまた元のように自分たちの道を歩むことになるだろう！

事実、マヤの古老の伝承はマニのセノーテをめぐるこの世の終わりの大事件を予告している。セノーテはマヤの都市文明をささえた泉のことだが<sup>14)</sup>、マニのセノーテが世界のただ一つの水源となる日がいつか来るというのである。世界の抑圧者たちはこの水源を確保しようとして、ふたたびマヤに戦争を仕掛けてくるが、スペイン人に敗退した後セノーテの入り口の石となって雌伏していた先祖の霊たちが——翼ある蛇神シュクキル・カン<sup>15)</sup>の援護の下に蜂起して抑圧者たちを打ち負かす、というのである。トゥトゥル・シウの最後の台詞は敗北した者の負け惜しみではなく、マヤの予言に根差した確信の表明なのである。長年の植民地支配はいつか断ち切られるであろう、しかしそれは血を流すことなしにはではないという確信である。それらのすべては、マヤのトゥチ・ルーム Tuch Lu'um、世界のへその緒であるこのマニの地でおこるといふのだ。

## ジャガー王朝

「作家の家」<sup>16)</sup>の演劇台本はたしかに書かれたものの

領域に属してはいるが、その内容は概してオーラルな伝承から引き出されたものである<sup>17)</sup>。ところが1992年の『ジャガー王朝』になるとこのパターンからはずれて、それがとりあげている古代マヤと征服時代のマヤの歴史はほとんどもっぱら書かれた文献に依拠している。すなわち第一景はベルギーの人類学者ジャン・デ・ヴォスの歴史研究『スミデーロの戦い』が土台だし、第二景はマヤの聖典『ポボル・ブーフ』、第三景は北米の人類学者リンダ・シェーレとデーヴィッド・フライデルの著書『森の王』が基本データで、それにシェーレがホンデュラスのコパンでグループにおこなった補足解説が参考資料として使われている。

この文献重視の傾向は一つには筆者とデ・ヴォス、そしてシェーレとの交友の結果であるが、英語の読み書きに堪能なスクリプターの大黒柱フランシスコ・アルヴァレスも大きな役割を演じている。そのため第一景と第三景はマヤの民衆史および近隣のチャパネコ人にまつわる近年の研究諸成果を忠実に反映したものになっている。「作家の家」は他に例を見ないほどに活発な国際交流活動を通して、長年の忘却を経て新たに発掘された数々の歴史的知見に接し、それをマヤ社会に還流することで現地の人々が歴史の真実を再発見するよすがたらしめとした。クリフォードが指摘するように「20世紀においては、アイデンティティはもはや連続した文化的伝統を前提とはしない。どこでも個人と集団は、外来のメディア、シンボル、言語を自在にとりこんで（再）収集された過去からローカルな演能を創発する」。今日のマヤは家から一歩出ればただちに外国人の観光客の視線にさらされる境遇にいるし、家の祭壇のすぐ隣ではテレビが外国の番組を流している——たしかにクリフォードのいう通りなのだ。

『ジャガー王朝』は反植民地主義の立場からスペインの征服と支配を告発した作品だが、同時にそれは、王朝間の武力闘争が9世紀におけるマヤ古典期文明の崩壊の

13) [原注] たとえば1月2日に幼子キリストを祝っておこなわれるオシュクツカブの「豚の頭の踊り」。ジタスでは1月21日、聖イネスを記念して「七面鳥の首切り踊り」が挙行される。

14) [原注] マヤ語の ts'onot (ツォノット) に由来する語。ユカタン半島一帯に広く見られる石灰岩の岩盤が落ち込んでできた穴を意味する。この窪地に地下水が浸み出て、今日に至るもこの地方の真水の主要な水源となっている。

15) [原注] 予言の要旨はドズル・エクが1993年2月に語ってくれたもの。いくぶん異なるヴァージョンもある。Allan F. Burns, *An Epoch of Miracles*, Austin: University of Texas, 1983; 38-38 and 244-57. 参照。

16) [原注] 劇作者集団としての「作家の家」の展開を詳細に論じたエッセイとしては、Donald H. Frischmann, "New Mayan Theatre in Chiapas: Anthropology, Literacy, and Social Drama" in *Negotiating Performance: Gender, Sexuality, and Theatricality in Latin/o America*, eds. Diana Taylor and Juan Villegas, Durham: Duke University Press, 1994: 213-238. Sna Jtz'ibajom の女性たちについては、Miriam Laughlin, "The Drama of Maya Women" Ms July/August 1991: 88-89 and Cynthia Steele, "A Woman Fell into the River: Negotiating Female Subjects in Contemporary Mayan Theatre" in Taylor and Villegas, op.cit. 239-256; また Patrick Breslin, "Coping with Change, the Maya Discover the Play's the Thing," *Smithsonian* August 1992: 78-87. and Stenna Craig and Macclaff Everton, "Maya Dreams," *summit* Fall 1993: 60-69 も参照されたい。

17) [原注] 『ジャガー王朝』はニューヨークの Mettawee River Company の Ralph Lee を客員演出家として迎えて制作された。「作家の家」は劇場での上演に際してはスペイン語で台本をつくり、マヤ・ツォツィルの観衆の前で上演するときは自動的に言語の切り替えをおこなう。スペイン語での上演はより広い観衆の獲得を可能にし、サン・クリストバル、メキシコ市や諸大学での公演、さらには合衆国の各地でも上演されている。本論文での引用は、スペイン語原版から私が訳出したもの。

主因をなしたという近年の歴史学の知見にもとづいて、平和主義の主張を前面に押し出した芝居でもある。作品の究極のメッセージは、「団結」と「平和」のメッセージであり、民族と人類が生き残るためには、それが不可欠の条件であると訴えている。

『ジャガー王朝』第一景の中心はデ・ヴォスの発掘した史料、おそらく17世紀に生まれたと思われるチャパネコ人の滅亡を語った伝説である。1534年の戦場で何千人ものチャパネコ人がスペイン軍への降伏よりも死を選んでスマデーロ山峡に身を投じたようすを、伝説は語り伝えている。民衆の敗北を栄光化しようとする原住民の必死の試みを、おそらく伝説は反映していると、デ・ヴォスは推察する。その後17世紀のスペインの歴史家によって伝説は書きとめられ、史実として今に伝えられている。

チャパネコ人はおそらく6世紀にメキシコ中央高地から移住してきた非常に攻撃的な民族で、隣のソケ、ツォツィル・マヤにたいして凶暴な支配をつづけた、ヌエバ・エスパニヤでももっとも勇猛な戦士であったといわれている（デ・ヴォス）。同盟を結ぶことを嫌がり、しかもドン・ディエゴ・ノカジョーラのような無節操な土豪の裏切り者もいて、それがスペイン軍にとっては決定的に有利な条件となった。芝居ではノカジョーラは、スペインの酒、宗教、衣服、植民地の取税人として人民からピンハネする金の分け前にすっかり魂を抜かれてしまった男として登場する。その上、この芝居では捕虜となった反乱軍の大將サンギエメ<sup>18)</sup>を拷問するのはツイナカンタン出身のツォツィル系マヤ人で、この役を復讐のために買って出たことになっている。異端審問官たちの祝福の下、サンギエメが生きのまま火に焼かれる。スナ・フツイバホム（作家の家）の主要な構成員はツォツィル系マヤ人であるにもかかわらず、サンギエメを初期スペイン植民地主義と闘う英雄的な抵抗者として社会的に認知することが重要であると、この集団の作者たちは確信している。このことは、第二景、シャーマンのマタウシルがツォツィル人の門弟に、サンギエメの魂が昇天するように、まだ火照りを残すその遺骨を拾い集めて川に投ずるように命じるくだりで明らかになる。

チョック 恐ろしゅうございます、先生。スペイン人やあのノカジョーラばかりではない、このチャパ

ネコの者どもも恐ろしい奴らでございます。彼らがマヤの友であったことなど、一度としてございません。

マタウシル さればじゃ、チョックよ。長きにわたって、われらが諸民族は互いに犬猿の仲であった。しかるがゆえにスペインの奴らは、われわれを容易く征服することができたのじゃ。

チョック しかしながら、マタウシル師よ。先生は何を思って、わが祖先の憎き敵どもの霊を先生の魔法の力で呼び戻そうとされるのでございましょうか？

マタウシル それを聞きたい、と申すのか？ われらが祖先と、この誇り高き戦士たちは、実はな、同じ一つの者なのじゃ！ われらはすべて、真なる創造の神・ユナブ・クーの同じ夢の落とし児なのじゃ〔……〕わしがお前をここに呼び寄せた理由はまさにそれ、われらが最古の歴史がこれより汝の前に示現されるであろう。世界が奴隷の身に陥れられた今、われらの神とわれらの魂を救う道は、ただこれ一つしかない。〔……〕もはや、相互に憎み合っているときではない。星座は変わったのじゃ。わが諸民族の思想と行動を一つに結ぶすべを、われらは学ばねばならぬ<sup>19)</sup>。

チョックは最終的に師の命令に従う。たちまち川から水蒸気が立ちのぼり、聖なるマヤの蛇神の幻が現れる。チョックが落ち込んだ夢に、観客も立ち会うことになる。つづく幻想場面はポボル・ブーフに記載された一連のエピソードで、双生児の英雄・イシュバラクとフナフプが死の灰から蘇った後、知恵くらべの結果、地底の国シバルバの悪しき郷紳たちを打ち負かす話である。ここでも最初のジャガーの諸王はマヤ民族の元祖と目されている。

第三景は古代マヤのヤシチラン王朝、とくに7世紀のバスカル・バラム（いわゆる楯ジャガー王）からクク・バラム（鳥ジャガー王）への譲位の時代の歴史劇だ。——クク・バラム王は、先王の長子ではない。年若だが、より有能な息子。母は後妻として娶った明らかに他国の高官の娘で、王国の絆を広げるための楯王の政略であったと思われる（シェーレとフライデル）。妬みのゆえに、この平和がどのように破壊されていくかを、マタウシル

18) [原注] 反乱軍の指導者の名は De Vos の研究で近年判明したものである。1534年の反乱と大虐殺を目撃した原住民の証言がグアテマラの Archivo de Centroamerica で発見されたのである。デ・ヴォスの著書はチャパスのインディヘナ住民にはほとんど知られていないから、「作家の家」がこれを使った芝居を公演することは観衆の歴史再発見の契機としても効果的なものといえよう。とりわけ抵抗のシンボルとしてのサンギエムにポジティブな光をあてることで脱植民地主義への歩みに、それは小さな、とはいえ意味深い一歩を刻むものだ。

19) [原注] 訳はすべて私がおこなった。

は語ってきかせる。

**マタウイル** このようにして平和がもたらされた。諸王国は一つに結ばれていた。楯王の死までは、な。その後に戦いはじまった。今にいたるまでも続く戦いが。〔……〕多くの者が鳥ジャガーを嫉み、王の足を引きずり下ろそうとした。しかし王は身を守るすべを心得ておった。

しかし鳥ジャガー王は野放図に野望をつのらせて、最後には自滅の道を進ることになる。

**クク・バラム** どうだ、われわれの軍に勝る強力な軍隊はないぞ。だれも、われわれを打ち破ることはできない。さあ、もう一步である。〔……〕わしは神殿と王宮を建設するための奴隷と貢物を得ねばならぬ！ヤシチランを偉大な帝国たらしめねばならぬ。わしは、すべての王国に君臨する皇帝となるのだ。

結局のところ、鳥ジャガーは捕縛の身となり、死に追い込まれていく。そしてチョックは突然、夢から目覚めるのだ。しかしこのシャーマンの弟子は、末路を歩みはじめる古典期マヤ文明の目撃者となった。マヤ世界のどこに関しても——今日のチアパス、ユカタン、カンペチュ、ベリーズ、グアテマラ、ホンデュラス、そのどこに関しても、——後期700年代から初期900年代にかけての時代について、歴史資料は黙して語ろうとしない。ヤシチランの最後の碑文（AD 808）は鳥王の息子がその後継者の委嘱を請けて記されたものであるが、そこには戦についての言及がある。現代の学者たちの推測によれば、偉大なマヤ文明の崩壊は後古典期の各支配家系間の軍事対立の激化が一因となってもたらされたもので、そのために近隣王朝間で戦禍が絶えなかったからだという（シエーレとフライデル）。

最後の幕切れ、シャーマンのマタウイルは弟子の学習成果を総括して、特段の注意を与えている。

**マタウイル** 平和に暮らそうとするのならば、諸民族の協調こそが必要じゃ。

**チョック** ああ、それが非常に困難なのであります。どのようにして諸民族は協和できるのでしょうか？異なる神々をいただき、異なる言語、異なる習慣をもつこの諸民族が。

**マタウイル** 違うのは名前に過ぎない。偉大なる創造の霊には、相違などはないのじゃ。諸民族は平和

に生きねばならぬ。そうせぬときには、大いなる厄災が降りかかるであろう。〔……〕多くの者が殺され、他の者たちは異様な病に倒れることになろう。われらは、われらの土地と文化を失うであろう。500年にわたって、いやそれ以上に長く、われわれは苦しみつづけるであろう、もしも、ともに生きることを学ぼうとしないならば。〔……〕尊厳と英知を保ち、正義を求めて団結することを学ばねばならぬ。〔……〕双生児のジャガー王たち、イシュバラクとフナフプは知恵と才知によって死に打ち勝った。野蛮な腕力によってではなかったではないか。**チョック** よく分かりました、師よ。では、私はどうすればよろしいのでしょうか？われら諸民族が、平和に生き続けるためには。

**マタウイル** もし一年だけ生きたいのならば、トウモロコシの種子を撒くのがよからう。もし百年、平和に生きたいのならば、千本の木を植えよ。しかし、もしも千年を望むならば、子どもたちを教育せよ。子どもたちが、その子どもたちを教育できるように！〔……〕それは、お前の手の中にある。なぜなら、お前には抵抗の精神があるからじゃ。

**チョック** 偉大なる太陽の王よ！この悪しき年月の後、われらの民を泣かせ続け給うな。（彼は泣きじゃくり、しかる後、決然と観衆を見上げて言う。）われわれは、決して死なないぞ。（終わり）

というわけで、チョックはこの芝居の観客を代表するかたちで、この歴史の強烈な教訓の目撃者となる。この芝居も、また『異端審問』もそうなのだが、そこに暗示されているのは今とは異質な未来に向かうほのかな希望の光である。希望は口頭伝承が伝える予言に根差している。『ジャガー王朝』での老シャーマン・マタウイルの言葉は、征服に先立って迫りくる苦難と従属を予言した実在したシャーマンたちの言葉を踏まえているのであるが、しかしマタウイルにおいては、希望は完全に人間の手に握られている。もしも正義を実現しようとするのならば、マヤとその諸民族は、ともに手を携えて生きることを、破壊的な妬み・嫉みを抑えることを、子どもたちを教育することを、学ばねばならぬ。ネガティブな事例に、不足はない。チャパネコ人の独善、ノカジョーラの買弁、鳥ジャガーの野放図な自己拡大欲。しかし同じようにポジティブな例にも事欠かないのだ。サンギエメの抵抗、力ではなく才覚によって悪鬼をやっつけたイシュバラクとフナフプのたたかい、楯ジャガーの平和同盟、そして老マタウイルの英知の言葉、「子どもたちを教育せよ……」。

最後に言っておきたいのだが、サク・ニクテの作品にもスナ・フツィバホムのそれにも、マヤの円環的な時間の概念が反映しているが、とはいえ彼らは古き予言の達成を辛抱強く座して待望しているわけではない。そうではなく、芸術家として作家としての役割を、アクティブな、だが平和的な課題として引き受けようとしているのである。そのための方途として、彼らは、インディヘナにたいする植民地支配を強い、そして根づかせた歴史の轍をあらためて見直そうとする。こうした仕事は相互理解の架け橋となるから、インディオ共同体ばかりではなく、より広範な観衆にとっても重要だと思う。民族間の戦争状態が世界規模で激化し、また現にチアパス州内でも民族対立が再燃している時だけに、それはいっそう重要だ。

インディヘナの新植民地的支配状況は21世紀に入ろうとしている今も、依然としてつづいている。——多く

の人権団体、社会学者、マヤの知識人層、カトリック教会、その他の人々が、新しい危機が発症する前に意識を覚醒しこの地域に変化を呼び起こそうと努めている。これを書きながら、いま、私は自問している。ポジティブな変化を主導するのは、結局のところ、誰なのだろうか？ 武装した農民なのか、その覚悟を決めた知識人や芸術家なのか、あるいはその両者なのか？ 今日の世界とマスメディアの中では、芸術よりも銃砲の方がもっと音が大きいことは証明済みだ。にもかかわらずドズル・エックとサク・ニクテ、そしてスナ・フツィバホムの作家たちは前進し、真正面から現実と対峙しつつ、千年紀の新たなとば口に立つ自己と他者たちに想起させつづけている。マヤの文化は依然として誇り高く息づいていることを<sup>20)</sup>。

(訳：里見実)

---

20) [原注] Carlos Armando Dzul Ek 先生とそご家族、Sac Nichte ならびに劇団員各位に深甚な感謝を。Dios botic! Sna Jtz'ibajom と Dr.Robert and Miriam Laughlin に Kolavall (ありがとう!) を。そして最後に Dr. Teresa Marrero Frischmann がこの論文に与えてくれた内々の援助に、Gracias! を。

[訳者追記] 訳者もまた清水透先生に Gracias! を。マヤ語・マヤ史に関するご教示を多く負っている。